

# 観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和四年八月二十七日(土曜日) 午後五時開演

## 狂言 謀生種(ほうじょうのたね)

嘘の巧みな伯父と挑戦する甥による作り話の競演です。富士山に紙袋を着せる話には琵琶湖の水を茶に立てて飲み干す話、播磨の印南野いなみのに寝て淡路島の草を喰う牛の話には三里四方の太鼓の話、そんな太鼓に張る革がなかうと言えば、そなたの言うた印南野の牛の革よと言い負かされます。降参した甥は嘘の秘訣を教わり、謀生の種という嘘の種を、庭土を掘り返して探します。もちろん種のあること埋めたこと自体、すでにこれもが伯父の嘘でした。

## 能 田村(たむら)

春たけなわの弥生半ば、東国から出た都一見の旅の僧(ワキ・ワキツレ)が花の清水寺に参詣します。そこへ萩帯を持つ花守の童子(前シテ)が現れ、地主権現の花盛りを観音の慈悲心が光を添えると称えます。童子は僧の求めに応じて坂上田村丸を願主とする清水寺草創の来歴を語り、見渡される四方の名所を教えます。折から音羽の峰に月が出て、地主の桜を照らす値千金の春の宵となりました。童子は「千手観音の衆生を濟度する御誓願は、枯れ木に花を咲かせるほどありがたい」と讚歎します。僧が常人ならざる気配を察して名を問うと、童子は「わが行く方を見よ」と答えて坂の上の田村堂に入ります(中人)。門前の者(アイ)が参詣して僧に清水寺のいわれを語った後、僧は夜もすがら散る花の蔭に寝て法華経を読誦します。そこへ輝く武者姿の男(後シテ)が現れ、坂上田村丸を名乗ります。彼は勅命を奉じて鈴鹿山の逆賊を平らげ、天下泰平の忠勤を果たしたのも、自力ではなくこの寺の観音に擁護されたと受け止めています。その時の悪魔退治の激戦を再現してみると、確かに千手観音が放つ矢は残らず鬼神を討ち果たしたのでした。(西村 聡)

前シテ(童子) 面(童子) 黒頭 縫箔 水衣 腰帶 扇  
後シテ(坂上田村丸) 面(平太) 黒垂 梨子打烏帽子 白鉢巻 厚板 半切 法被  
腰帶 太刀 扇